

JOMF 派遣医師便り (2018. 4)

◆シンガポール◆

アジア太平洋旅行医学会に参加して

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

先日、タイ、バンコクで開かれた第12回アジア太平洋旅行医学会に参加させていただきました。短期間の参加でしたが、新たな知見を得たり、人間関係を築けたりと大変有意義な時間でした。今後も積極的に参加していきたいと思います。

その中で3点ほど印象に残ったことを報告します。

1. 狂犬病皮内注射の見学

ワークショップでタイの中心的狂犬病、蛇毒研究施設に併設された赤十字病院を訪問し、狂犬病の暴露後接種の実際を見学しました。上記施設で接種を担当していたのは看護師で、50名程の医療関係者が注目するという緊張を強いられる環境の中にもかかわらず、皮内注射を、全く出血させず、左右両側上腕、大腿に次々と打っておられました(写真1)。練度が高く、相当経験を積んでいると推察されました。実際にそれだけ対象となる症例が多い(国全体で年間10万件以上の暴露後接種が行われている)ということですので、逆に少し怖さを感じましたが、暴露後接種を積極的に行うことなどの対策により、タイでは狂犬病による死者は近年、年数人にまで激減しているとのこと。また、注射されていたのは実際の患者さんで、打たれる場面を衆人で見学するという状況は医学生時代の大学病院以来の経験でしたので、昔懐かしい感じもしました。ガンマグロブリンの接種は実際の患者さんではなく、動画での紹介でしたが、怪我のグレードに従い、積極的に行っていました。発症したら、ほぼ100%死亡するという厳しい事実が背景にあることを思い起こしました。

写真1 狂犬病皮内注射



2. A型肝炎ワクチンの適応

国際旅行医学会のかつてのスタンスは、幼少期は発症率が少なく、また、自然感染すれば、終生免疫となるので、幼少期はむしろ注射はしないほうがよいというものでしたが、幼少期でも発症例が無視できないことや、ワクチンの効果が、従来言われていた10~20年より長く続くと考えられるようになったことで、今回、幼少期にもワクチン接種を勧めるという方針に転換したとのことでした。(元々、製品としては、1才以上で接種可能でした)。

3. シンガポールでのインフルエンザの月別推移

シンガポールで感染症専門施設を併設する病院の先生が、その病院の救急外来でのインフルエンザの月別診断数のグラフを示していらっしゃいました。年間を通じて症例があり、ピークが年2回あるといった傾向は当院のものと似ていました(グラフ1)。当院の患者はほぼ全て日本人ですが、少なくともインフルエンザに関して、日系コミュニティはシンガポールに於いて例外ではないことがわかったことは有意義でした。ただ、ピーク月に1か月ほどのずれがあること、10-1月はシンガポール施設では症例が少ないという違いもありました。この理由としては、一般外来患者さんの中でインフルエンザの患者さんを診ている当院と、救急外来という医療スタンスの違い、学校の長期休暇の時期の違いなどが考えられますが、定かではありません。今後も、注意深く観察していきたいと思えます。

グラフ1

